古典籍データベース化事業開始

松下　眞也（調査役）

前号でお知らせしたとおり、2005年4月より、早稲田大学図書館の所蔵する和漢古書・貴重書約30万冊を対象としたデータベース化事業がスタートした。館内に「図書館蔵古典籍データベース化推進プロジェクト」をたちあげ、中央図書館１階に「図書館蔵古典籍データベース化推進プロジェクト室」および同作業室を設けて、書誌データ入力作業および全文画像データ作成のための撮影作業を開始した。現在、約半年を越えたところで、洋学コレクションを中心として約6,000件の書誌レコード、約20万カットの画像データが蓄積されている。洋学コレクションとしてある程度まとまったところで、公開に踏み切る予定である。すべての入力が終わってから公開するのでなく、特定分野のまとまりごとに順次公開してゆく方針である。

この事業のキーポイントは「公開」にある。周知のように、これまで、古典籍は古い貴重な資料であるがゆえに、どうしても保存が優先され、利用には一定の厳しい制限を設けざるをえなかった。しかし、どんなに貴重な資料でも、利用され、研究されなければ、本当は意味がない。古典籍は人類ののこした知的遺産であり、すべての人に活用されるべきものだからである。

古典籍の書誌レコードは、WINEの和書の入力仕様に準じ、WINEのなかに取り入れられるが、書誌データ画面をクリックすれば、ただちに鮮明なカラー撮影による全文画像に飛ぶことができる。これだけでもすでに十分画期的なことであるが、さらに画期的なことは、これらの画像がGoogleなど一般の検索エンジンを用いることにより、容易に検索できることである。すなわち、利用者は、こちらのデータベースの存在を意識することなく、古典籍の貴重な画像に接することができるようになるのである。

実はこれまでも部分的に、早稲田大学図書館が有する貴重な資料をデジタル画像化し、公開していた。西垣文庫の錦絵や引札、中国の年画コレクション、大隈重信関係資料、その他展覧会に出品した資料などである。これらはGoogleですぐにヒットするので、日本国内はもちろん、外国からもアクセスが多く、資料についての問い合わせや利用の希望も増えていた。一例としては「授業で使いたい」という中学・高校や生涯教育の現場からの要望がふえてきたことがあげられる。この需要を背景に、より網羅的、完全な形での公開を目指しているのが本事業である。

古典籍のデータベース化は、５年計画で完遂することを目標にしている。大まかな計画は、

2005年度　洋学関連資料・自然科学分野（科学史）のデータベース化（現在進行中）

2006年度　文学・芸術および社会風俗関係資料のデータベース化

2007年度　歴史・伝記分野のデータベース化

2008年度　哲学・宗教分野のデータベース化

2009年度　社会科学分野のデータベース化

というもので、毎年それぞれ約６万冊前後、1万件以上の書誌レコード、50万カット前後の画像データを作成してゆくことになる。

自館のカード目録や冊子目録、国文学研究資料館の古典籍目録データベースなど先行する参考データなどがあるとはいえ、現物の古典籍資料一つ一つの書誌作成は難しい問題を含んでいる。また撮影においても、資料がさまざまな形状をしていること、劣化しているものが多いことなど、きわめて難事業になることが予想される。委託業者である紀伊國屋書店、東京都板橋福祉工場のスタッフとともに力をあわせて、データベースの完成を目指したい。これが完成すれば、ほとんどわが国ではじめての網羅的な古典籍データベースのモデルとなりうるし、国内・国外の古典籍を所蔵する諸機関との連携協力も視野に入ってくる。Web上で容易に古典籍のオリジナル画像を利用できるようになれば、これまでの研究・教育のスタイルを変え、あらたな視点・発想をもつ研究者の育成にもつながってゆくのではないだろうか。